

シベリア抑留

第1章 発端

120781164 犬塚達也



1節 十五年戦争末期の満州

1905年、日本は日露戦争で満州を勢力下

1919年、関東軍は満州守備を目的に創設

1931年9月18日 満州事変

関東軍により奉天近郊で柳条湖事件発生



1932年

満洲国を建国、皇帝溥儀を執政

満州国には150万もの日本人が移住

41年4月 日ソ中立条約に調印

6月 独ソ戦開始

関東軍特別演習（関特演）を準備

対ソ攻撃の準備



1945年8月9日

- a) ソ連の対日宣戦布告
- b) ソ連軍が、満州攻撃を開始



2節 「五族協和」「王族樂土」

日本人の満州への移住は国策として推進

1936年

- a) 広田弘毅内閣は日本からの満州へ入植を計画
→20年間で100万戸、500万人を予定

- b) 実際は敗戦時150万人の日本人が生活
→その内27万人が開拓移民団



1937年

日中戦争が開始

成人男性の満州移民が困難

→15～19までの青少年を移民対象に変更



1938年

移民してきた青少年達による義勇隊の発足
義勇隊による活動内容

- a) 満州で開拓に従事し、同時に軍事訓練
- b) 対抗日ゲリラ武装開拓団

満州での訓練所は小興安嶺の丘陵地



3節 「無敵」 関東軍

1942年夏 18師団、兵員65万、戦車675

甲装車155、飛行機750

→「無敵」 関東軍

本土決戦準備、内地への移送が継続

戦車部隊は1945年春に本土決戦のため移動

部隊には学徒動員で来た者も存在



1945年夏

関東軍の「根こそぎ動員」の開始

18歳～45歳の在満邦人男性を召集

結果、兵員の増大に成功

しかし、老兵や、定員不足の師団が多数



当時の戦法や武器

- a) 三八式歩兵銃の使用
- b) 槍の先に包丁を縛るような中世的な戦法
- c) 特攻の強要
 - 十死零生の戦法



4節 ソ連に講和の仲介役を依頼

1945年4月5日

ソ連から日ソ中立条約の延長拒否を伝達

→新条約締結のため広田弘毅元首相を派遣

新たな条約の提示内容

- a) 満州の中立化
- b) 終戦後の撤兵
- c) その他ソ連提示の諸条件を議論



5節 最悪の結末

1945年7月2日

駐ソ大使の佐藤に申し入れの回答の催促を指示

また、近衛文麿をモスクワに派遣を指示

近衛は終戦に関する天皇の親書を持参

→ソ連モロトフ外相は拒否



1945年8月8日午後8時

モロトフから日本への宣戦布告文の宣言

内容

- a) 7月26日連合国宣言に参加
- b) 8月9日より戦争状態に突入
- c) 日本救出のため参戦



6節 消えた才能

圧倒的戦力のソ連軍による被害

- a) 国境付近の関東軍部隊は次々と消息
- b) 虎頭など一部を除きほぼ全滅
- c) 1週間程度で日本人約5万人の死亡
→この戦闘で若く才能の保持していた
若者も死亡



7節 「特攻」

ソ連の満州侵攻への関東軍の行動

- a) 関東軍総司令部の重要書類の抹消
- b) 最前線の兵士の特攻
- c) 決死隊のソ連の満州侵攻の遅延



8節 軍事優先、民間人は犠牲

8月9日以降

ソ連軍に加え満人の開拓団、居留民の襲撃
集団自決が各地で勃発

→その結果多数の中国残留孤児の発生



民間人の行動

- a) 満州への避難の特別列車の運行
- b) 列車で民間人、官吏、軍人の順で避難
→実際の民間人の乗車数は全体の1割程度



この様な被害が増加した要因

→ 関東軍が侵攻の事実を非伝達

関東軍は民間人を守衛せず本来の目的放棄



9節 犠牲は居留民の自己責任？

敗戦時の被害数

- a) 満州の日本人150万人中18万人死亡
- b) 開拓移民27万人中8万人死亡
- c) 多数の中国残留孤児の発生



関東軍の行動への怨嗟の声への反論

→ 関東軍作戦参謀の草地大佐の主張

- a) 関東軍は作戦第一主義
- b) 居留民保護目的の作戦は非実行
- c) 軍の主要任務は戦闘
- d) 関東軍は居留民保護より作戦が大事



居留民の防衛方法

→草地大佐の思考

無抵抗こそ最大の戦力

ソ連軍の暴行の理由

→無用有害の微小抵抗の反作用

